

「最高の手紙」

㈱ワシントン靴店 五十嵐康真

二〇時五〇分、閉店一〇分前の曲が館内に流れ始めた頃に、その女性は来店された。

「いらっしやいませ」

私が勤務する新宿は、夜が深まってもむしろ往来する人は増える土地柄。これくらいの時間帯でも買い物を満喫される方は多い。しかし、見たところ二〇代と思われるお客様は、心なしか急いでいるような表情だった。

春夏のポンプスをいくつか手に取り、靴の裏を見たりヒールをまじまじと覗いている。そのうちのふたつのデザインで悩み始めた。ひとつは、いわゆる通勤向けの黒ポンプス。一方は、大きめのバックル飾りが付いて、ヒールも太めのスウェードネイビーポンプスだった。どちらも美しいシルエットでおすすだ。

聞くと、やはりお仕事で使う靴を見に来られたとのこと。しかし、明日にでも履きたいため、必要に迫られていて楽しく靴を見比べている余裕はなかった。

「自分のお客様には損はさせない」

私が日頃大事にしているモットーだ。早速、フィッティングに取りかかった。時間も、あと僅かしか無い。

二十二センチ前後を履かれる方からは、「どこを探しても、自分のサイズが置いてない」「可愛いものが少ない」といった声を聞く。お客様もそんな悩める女性の一人だった。目の前に並んでいる可愛い靴が履けないのは、辛いことだ。

幸い、ふたつともサイズは何とか履けるようだった。職業柄、そこまで堅苦しい靴ではなくても良いらしく、私は休日でもお洒落に履けそうなネイビーを勧めてみた。こちらを試着した時の方が明らかに、来店時にはなかった素敵な笑顔がされたからだ。

左右の足の大きさに差があり、時間が許される限り調整して何とかご納得頂け

た。気付くと周りの店はシャッターを下ろし始めていた。

「気に入ってもらえるだろうか……」

数日後、そのお客様からメーカー本社に通のメールが届いた。文面には、調整してくれたことへの感謝とともに、「今までの人生で最高にぴったり足に合う物を購入できました」とあった。

何故だろう。面と向かって言われる以上に嬉しかった。

靴が好きでこの仕事をしている自分にとって、〃人生で最高の〃お手紙を頂いた気がしたのだ。たった一〇分しかお話できなかったというのに。

いつか、感謝を返信できるだろうか。二〇時五〇分の曲を聴く度、そう願わずにはられない。